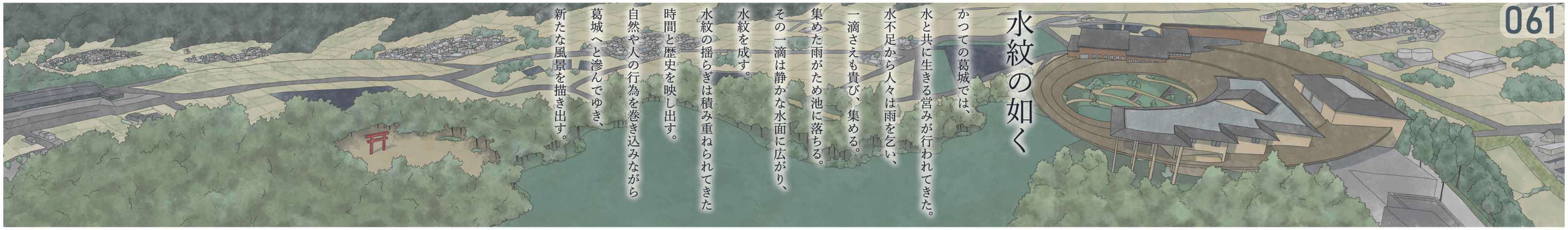


水紋の如く

かつての葛城では、
水と共に生きる営みが行われてきた。
水不足から人々は雨を乞い、
一滴さえも貴び、集める。
集めた雨がため池に落ちる。
その一滴は静かな水面に広がり、
水紋を成す。
水紋の揺らぎは積み重ねられてきた
時間と歴史を映し出す。
自然や人の行為を巻き込みながら
葛城へと滲んでゆき、
新たな風景を描き出す。

01. 水との関係性から再考する

1-1. 葛城の歴史

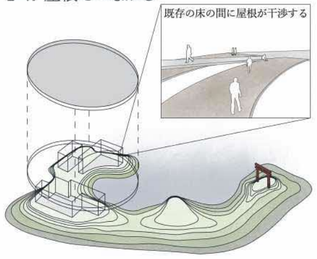
葛城では水不足から水を貴重に扱う文化があり、雨を祈り、ため池をつくり、人々の生活は水と深く関わっていた。しかし、現代ではその風習は失われ、水と人の繋がりが薄れている。

1-2. 一滴から広がるつながり

長い歴史の中で形成された古きため池。そこに一滴の水が落ちた時、水面に波紋が広がっていく。そのように、ため池を中心に人々の活動が伝播していく場を再編する。

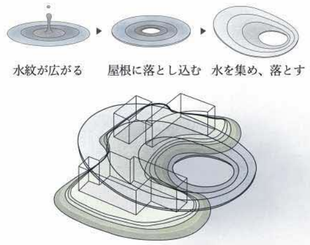
02. 風景に寄り添い、自然と建物をつなぐ形を環境との関係性から導く

2-1. 屋根でつながる



既存の分断された棟を一体化する大屋根を架けることで、人と池と建物の新たな関係性を生み出す。また、屋根が建物に干渉することで建物内外で新たな動線が生まれ、交流の場を増やす。

2-2. 水滴から広がる屋根

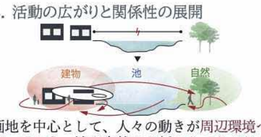


屋根形状は、水紋が広がり水を集めるような円形で構成され、その屋根に孔を設けることで自然光が差し込み、雨の日には水が滴り落ちる。このような自然の演出により、人々を自然と建物へ導く。

2-3. 視線の抜けた先

かつてこの土地で行われていた神に向けた雨ごいから、神を敬ってきた歴史に倣い、前項の屋根に空いた孔からため池、土地の象徴である神明神社を一本の軸で通し歴史との関係を繋げる。

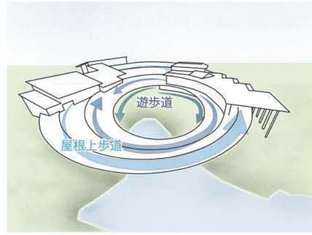
2-4. 活動の広がりと関係性の展開



計画地を中心として、人々の動きが周辺環境へと広がっていき、池や自然との新たなつながりや、人々の新たな活動の場が緩やかに生まれる。

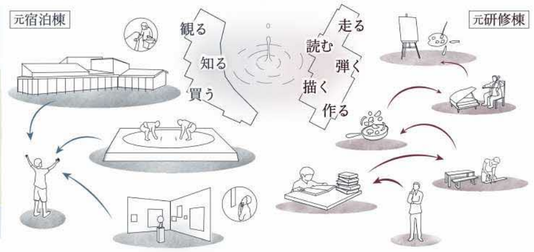
03. 波紋の揺らぎに呼応する空間

3-1. 回遊性のある屋根



雨を集める斜めの屋根形状が、外部の遊歩道を巻き込みながら建物に干渉しているため、上下階を緩やかにつなぎ、既存の分断されている３つの棟の内外をぐるりと一周できるように計画した。

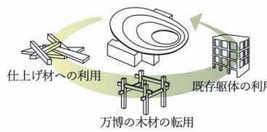
3-2. 多様な利用者に応じた建築空間



ため池を中心に、遊歩道を介して波紋のように建物内へと機能を分散させる。元宿泊棟は地域ネットワークと連携した機能を合わせ持ち多様なサービスを受けることができる。元研修棟は吹き抜けと干渉した屋根によるスキップフロアにより、段階的に空間を繋ぐことができ、幅広い利用客が交じりあうことができる計画とした。

04. 自然負荷への配慮とサスティナブルな提案

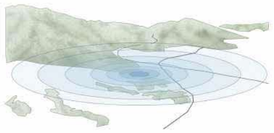
4-1. 既存建物の活用と大阪万博の木材の利用



既存建物を活用し、敷地内の伐採した木は仕上げ材として利用する。新築の屋根は大阪万博の木材を再活用する。循環設計と環境配慮で持続可能性を実現する。

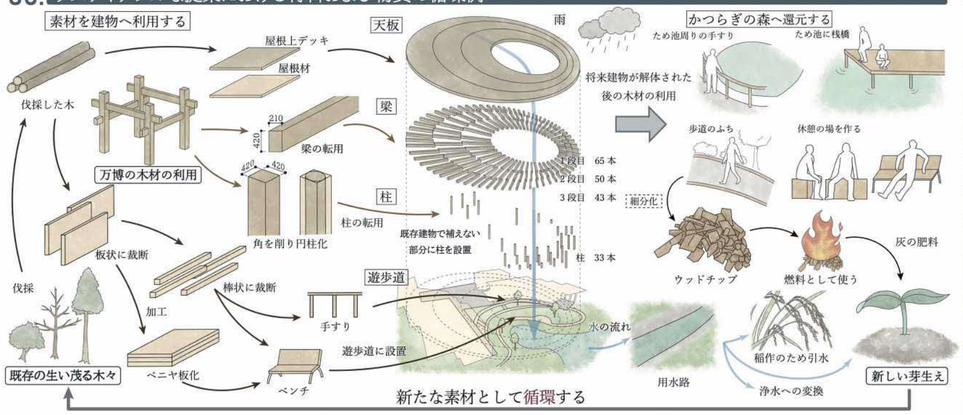
05. 葛城に広がる波紋

5-1. かつらぎみらいの森から広がる地域活性化

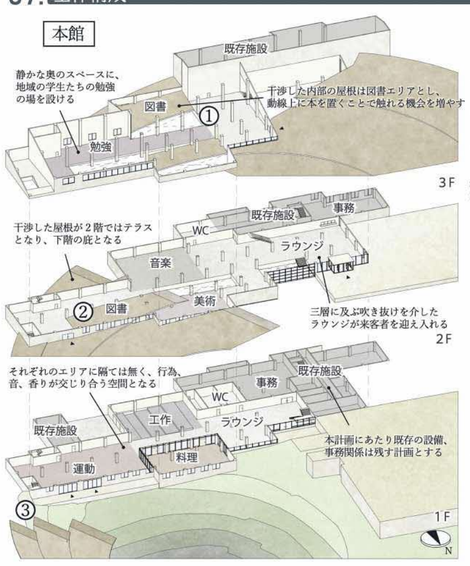


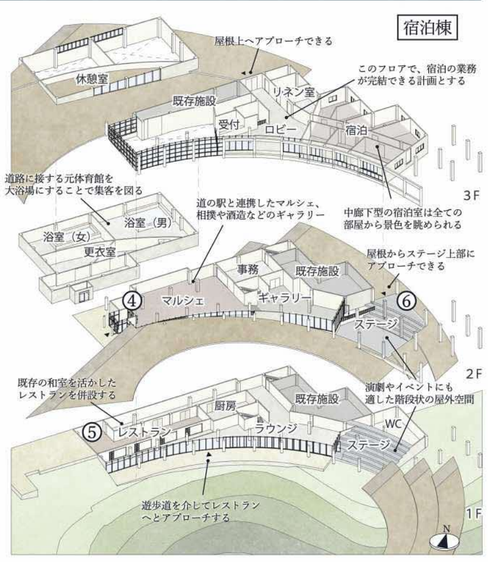
建物周辺から再生された水と人のつながりは、敷地全体を巻き込みながら広がる。やがてそのつながりは葛城全体へと広がっていく。

06. サスティナブルな提案における材料および物質の循環例



07. 全体構成





08. 各空間の透視図および断面図

①

吹き抜けにより、音楽エリアの音が空間に響き渡る

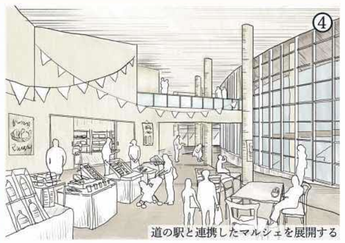
②

各エリアが干渉した屋根により緩やかに繋がる

③

屋根上部が各棟や広場を繋ぐ動線となる

屋根の孔からは神社の存在を感じ、屋根の下では憩いの場が広がっている

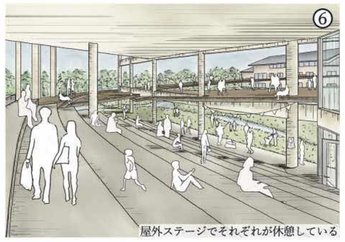


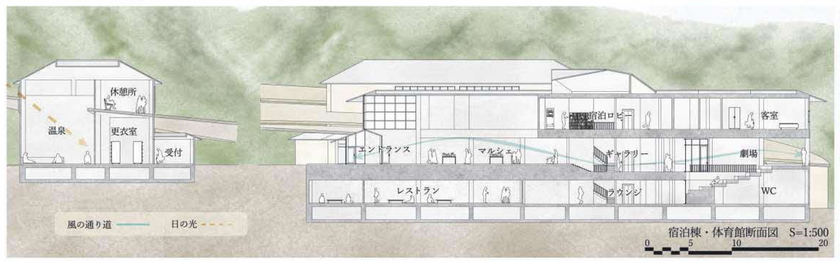
④

道の駅と連携したマルシェを展開する

⑤

既存の和室を活かしたレストランに人が集う



⑥

屋外ステージでそれぞれが休憩している